九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

おとぎ話のジェンダーとフェミニズム

谷口, 秀子
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5498

出版情報：言語文化論究. 11, pp.29-38, 2000-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

おとぎ話のジェンダーとフェミニズム

谷 口 秀 子

1．おとぎ話におけるジェンダー

よく知られている古いおとぎ話には，固定化されステレオタイプ化された性役割（ジェンダーロール）が見られるのは，もはや周知の事実である。そして，このようなおとぎ話においては，女性の主人公の多くに共通した特徴がある。『シンデレラ』や『白雪姫』などの例をはじめとして，女主人公は常に若く美しく「か弱い」女性であり，そのことが結果として彼女を幸せに導く大きな要因となる。また，多くの場合，女主人公は継母などの他の女性のひどい仕打ちによって苦難に陥るが，彼女はただ健気に耐えるのみで，自らの力で苦境から脱出することはなく，求婚者となる男性（王子など）の出現によってはじめて苦境から救われ「幸せ」になる。改めて言うまでもなく，その幸せとは助けてくれた男性との結婚であり，「そして二人はずっと幸せに暮らしました」（“and they lived happily ever after”）という言葉とともに多くのおとぎ話は終わる。

おとぎ話の女主人公は，自らの能力や努力で問題を解決するのではなく，助けてくれる男性の出現をただ受け身的に待つのみである。そのため，女主人公は，男性が苦難や障害を乗り越えて彼女を助ける気になるように，この上なく美しい従順な純潔の存在として描かれる。このような女主人公の「魅力」を引き立てるのは彼女にひどい仕打ちをする別の女性の存在であり，その女性は女主人公とは対照的に徹底した悪の権化として描かれ，両者は聖女（virgin）と魔女（whore）という二項対立の存在として描かれる。

数多くのおとぎ話において繰り返し提示される無力で受け身の女性とそれを救い出す頼もしい男性という固定化されたジェンダー認識，および，女性を聖女と魔女の両極に分ける男性特有の価値観の押しつけは，男性優先の社会が長い年月をかけて作り上げたステレオタイプの反映である。このような女性やジェンダーに関する固定観念は，「昔々」で始まるおとぎ話の中に取り込まれているが故に，一種の既成概念となり，「真実」としてすら受け取られかねない危険がある。また，おとぎ話に含まれる，王女や王子の存在，素敵な王子との結婚，きらびやかな結婚式，わくわくする冒険，何でも可能にする魔法などの持つロマンティックで夢のようなイメージが，上にあげたような因習的なメッセージを包み隠すばかりか，それを抵抗なく受け手に取り込ませてしまう手助けをしている。さらに，おとぎ話は，その読み手あるいは聴き手に社会経験が未熟で，客観的な批評能力を備えていない幼い子供をも含むという点で，小説などの他の文学形態に比べてより深刻に固定化されたジェンダー意識を再生産する装置となっていると言えよう。

2．*The Clever Princess*：「フェミニズム童話」の概要

1983年にイギリスで出版されたDiana Coles著*The Clever Princess*[1)]は，上のような従来のおとぎ話におけるジェンダー提示の在り方を問い直す創作おとぎ話である。男女平等社会の実現という目的をもって女性の本の出版を手掛けていたシーバ・フェミニスト出版社（Sheba Feminist Publishers）から出版されたという経緯からも，一人の女性によって書かれたこの作品が明確なフェミニズム的意図を持って世に送り出されたことは明らかである。また，日本でも1989年に「子供が理解しやすいフェミニズムの本」[2)]として翻訳され，「フェミニズム童話」として大きな反響を呼んだ。

The Clever Princess は昔々の城の場面から始まる。主人公のアリーテ（Arete）姫は何年も前に母を亡くし，父王と暮らしている。アリーテは賢い女性であり，読み書きが出来るのに加えて，たくさんの本を読破しており，王女のたしなみに反して，自分の意見を述べ，議論をしてしまう。王はいつか金持ちの王子が宝石を差し出してアリーテとの結婚の許しを求めに来るのを待ち望んでいるので，娘が賢いことを知ると，彼女が賢さ故に結婚出来ないのではないかと心配し，結婚相手を探すおふれを出す。王子が次々に求婚にやって来るが，アリーテの賢さを知ると結婚する気をなくして帰ってしまうので，王は彼女の賢さにひどく腹をたてる。

何ヶ月か後，悪巧みを持ったボークス（Boax）という魔法使いが求婚にやって来る。彼は，「賢い女性を妻にしたいのです。結婚したら姫が本当に賢いかためすために三つの仕事をしてもらいます。もし出来なければ姫の首を落としてもいいという許可を下さい」と言う。王はボークスのさし出す宝石に目がくらんで承諾してしまう。結婚する気のないアリーテは一番親しい老婦人を訪ねて相談する。おばあさんは，この国の法律では父親が結婚を命令すれば娘はそれに従わなくてはならないことをおしえる。そして，自分が魔女であることを告げると，三つの願いが叶う金の指輪をアリーテに与えて，「自分が賢いということを忘れないで」と言う。

結婚式の後，直ちにボークスはアリーテを自分の城に連れて行き，暗いじめじめした地下牢に閉じこめる。実は，ボークスは，アリーテが自分を死に至らせるという占いを聞いて，彼女を殺すために結婚したのである。アリーテは地下牢のネズミを恐れることもなく，部屋を居心地良く片づける。そこに城の料理人の女性アンプル（Mrs Ample）が現れ，彼女に親切にしてくれ，「あなたが賢い王女様だということを聞いています」と言う。アンプルはアリーテの味方となり，アリーテにはおいしいごちそうを，ボークスたちには虫などの入ったまずい食事を出し続ける。

アリーテは魔法の指輪の力を，問題を解決するためではなく，地下牢で退屈を紛らわすために用いる。彼女は，一回目の魔法で絵の具と筆を出して地下牢の壁に絵を描き，二回目の魔法では針と糸と布を出して自分や他の女性たちの服を作る。また，三回目の魔法では，紙とペンとインクを出して物語を書き，女性たちに読んで聞かせる。

ボークスは，それまでどんな勇敢な騎士も果たせなかった難しい三つの試練をアリーテに課す。第一の難題は，何千匹もの蛇がいる森にある永遠に湧き出る井戸から魔法の水を汲んで来ること。第二の難題は，岩山の頂にある金色鷲の巣の中にある魔法のルビーを取っ

て来ること。第三の難題は，遠くの牧場にいる銀色の雌の荒馬を捕まえること。アリーテは，力に頼った鎧甲の騎士とは違って，自然や動物をいつくしみながら持ち前の賢さを発揮して三つの難題を成し遂げる。

ボークスは，三番目の課題を成し遂げて無事に戻ったアリーテを見て逆上し，彼女を殺そうとするが，アリーテの飼っている蛇に驚いた銀色の馬に蹴り上げられて死んでしまう。翌朝アリーテとアンプルは城をきれいに片づけて居心地の良い場所に変える。アリーテは指輪をくれた魔法使いのおばあさんを城に呼び寄せるが，宝石と引き替えに自分をボークスに売り渡した父親のことは決して許すことが出来ない。アンプルはアリーテに，この国の者は皆彼女に女王になって欲しいと思うだろうと言う。アリーテは，困っている国々を永遠の井戸の水と病気を治すルビーを使って助けるために，しばらの間旅に出ることにする。留守を引き受けたアンプルたちは，この国の多くの人を集めて相談し，アリーテの望み通り，すべての人が幸せに暮らせるような法律を作る。

3．固定化されたジェンダーの解体

The Clever Princess において，作者は周到におとぎ話の必須とも言える事柄を網羅し，男女の描き方以外はおとぎ話の定石を忠実に守ることにより，古いおとぎ話とのジェンダーの扱い方の違いを際立たせ，従来のおとぎ話に潜む固定化されたジェンダーの提示を問い直すことにかなり成功している。*The Clever Princess* がおとぎ話の定型を注意深く踏襲している例としては，時代設定が昔になっていること，筋の繰り返し（三回）があること，登場人物が王，王女（お姫様），王子，魔法使いなどであること，登場人物が善人と悪人にはっきり色分けされていること，女主人公の母親が他界していること，魔法が使われること，動植物が擬人化され口をきくこと，主人公が悪者によって試練を与えられること，女主人公が監禁されること，勧善懲悪的であること，求婚と結婚があること，ハッピーエンドで終わること，などがある。

作者はおとぎ話の特徴を十分に踏まえた上で，ステレオタイプ化されたお姫様像をはじめとする固定化されたジェンダーの解体，破壊，否定を行う。作者によって再構築された女主人公像であるアリーテは，従来の女主人公とは異なり，美しさではなく賢さ（“cleverness”）を特質としており，自分の賢さを隠そうとしない，自分の意見を持っており自己主張をする，従来の作られた女性らしさを否定する，結婚を望まない，行動的であり，与えられた環境を良い方に変える努力をする，男性の援助や与えられた魔法に頼らずに自分の力で問題を解決する，ハッピーエンドの結末で城に安住しないで旅に出る，というように創造される。また，その他に，おとぎ話のジェンダーや慣習を逆転させている例としては，話の結末が「幸せな」結婚で終わらない，物事を解決する際にそれを助ける男性が一切登場しない，女性が女性の敵にならない，悪い（継）母が登場しない，女性同士のつながりや協力がある，男性とは違った方法で問題を解決する，男性が勇敢に冒険する場面がない，男性が女性を獲得しない，理想化された男性（「白馬に乗った王子」など）が登場しない，女主人公に求愛する男性は皆人間的に魅力がなく，知性でも彼女に及ばない，力に頼る騎士などの男性的な価値観に対する批判がある，父親に対する批判があるなどのことがあげられる。

4．新しいロールモデル

おとぎ話における女性の登場人物は，シンデレラや白雪姫のような，美しさばかりが強調され，自分の境遇を変えてくれる男性の出現を待つ受け身で忍耐強い女主人公（聖女）と，彼女たちにひどい仕打ちをし，時には命をも奪おうとする行動的で性悪な女性（魔女）の二つに大別されるが，聖女的な女性には結婚などの「幸せ」が訪れるのに対し，魔女的な女性には不幸な結末が訪れるというのが普通である。そのため，おとぎ話においては，「望ましい」女性のロールモデルとしてはシンデレラ的な，助けてくれる男性を待つ受け身の女性以外に選択肢はなく，女性の幸せも王子のような素敵な男性との結婚に限られる。従って，このようなおとぎ話による固定的なジェンダーの刷り込みが，若い女性を中心としたいわゆるシンデレラコンプレックスなどの心的葛藤の原因になっているのは想像に難くない。しかも，女性が自分の意見を持ち行動する生き方を選ぶ場合，そのロールモデルはおとぎ話の中には存在しないばかりか，ステレオタイプ的な理想の女性像の圧倒的な存在感がその障害ともなりかねないのである。

The Clever Princess において，作者はシンデレラや白雪姫のような王子の出現を待つ女性像に代わる新しいロールモデルを作り出そうとしている。作者が新しいロールモデルとしようとしたアリーテの特質は，知識や判断力を備えた賢さと行動力である。作者はこの賢いアリーテに自立した聡明な女性のイメージを取り入れようとしているが，女性の賢さは，助けを待ち男性に頼って生きるような従来のおとぎ話の女主人公にはあまり重要とされておらず，場合によっては，否定的，嘲笑的に扱われることすらある。*The Clever Princess* の以下のエピソードにおいても，女性の賢さは否定的な扱いを受ける。アリーテは話し方のレッスンで，意見を言わずに「本当でございますか」「何とおもしろいのでしょう」「そのことについてぜひお聞かせ下さい」（“Oh really”, “how interesting”, “do tell me about it”(p. 6)）と言うように習っても，いつも自分の意見を述べて，相手に反論してしまう。また，彼女の知的で自己主張の多い発言は，アリーテが従来のおとぎ話の女主人公のような「性的に好ましい物言わぬ女性」（“woman as a sexually desirable, silent object”）ではなく，男性にとって性的に好ましくない「言語能力のある口数の多い女性」（“women of words, women with power over language”）[3]であることの象徴であり，彼女が伝統的なおとぎ話においては「幸せ」になる条件を満たしていないことを示している。

アリーテが賢いことを初めて知らされた父王が驚愕し，娘が結婚出来ないのではないかと心配する場面は，結婚する女性は賢くてはならないという因習的な価値観を強調したものである。[4]

> ‘You realise, if people find out you’re clever, no-one will want to marry you?’ said the king. ‘Goodness me, what prince wants a clever wife? Nobody is going to want to marry a girl who keeps arguing with him and telling him what she thinks. He wants a wife who is going to agree with him and not have a lot of ideas of her own. Princesses are expected to be beautiful and charming and not clever. Pah!’ (p. 8)

ここには，女性は美しく魅力的でなくてはならず，賢いなどもっての他であり，男性の言

うことにはいつも同意するべきであって，自分の意見など持ってはならないという因習的な価値観がはっきりと示されている。そして，王の「王女はみんな結婚するものだ。おまえに結婚以外何が出来るのだ」("All Princesses get married. What else could you possibly do?"(p. 9)) という言葉に集約されるような，結婚以外には女性の選ぶ道はないというおとぎ話の言説のもとでは，賢さが女性にとって最も大切とされる結婚を困難にするという危惧から，賢い女性は極めて否定的にとらえられる。

おとぎ話の価値観においては，賢いアリーテは，男性の結婚相手としては好まれない知性の持ち主であり，それを隠すこともしないため，幸せな結婚をする女性の条件を欠き，不幸せになるべき人物となる。この決まりに則って，アリーテは，宝石に目が眩んだ父の命令で，「賢い女性を妻にしたい」("I want a clever wife."(p. 12)) と言って求婚しに来た魔法使いのボークスと結婚させられ，彼女の命を狙っているボークスの城の薄暗い地下牢に閉じこめられることになる。ここには，おとぎ話によく見られる，悪者には懲らしめや不幸が訪れるという決まったパターンが用いられている。つまり，男性に好まれるシンデレラや白雪姫は物語の結末で結婚をして「幸せ」になるのだが，賢いが故に結婚相手が見つからず，自らも結婚を望まないアリーテは，因習的なおとぎ話の世界では懲らしめられるべき存在となる。従って，従来のおとぎ話であれば，小賢しい女の行く末に幸せはない，幸せになりたかったらもっと控えめにしなさいというメッセージを含みながら，アリーテ姫の物語がこの時点で終わっても全く不思議ではない。

アリーテの賢さは，父王や話し方の教師，求婚に来た王子たち，ボークスなどの男性にはことごとく忌み嫌われる。しかしながら，これとは対照的に，アリーテの賢さは彼女に魔法の指輪を与える魔法使いのおばあさんやボークスの城の料理人らの女性には肯定すべきすばらしい才能と受け取られる。魔法使いの女性はアリーテを「自分が賢い女性だと言うことを忘れないで，そして，あまり心配しないで」("just remember, you're a clever girl and don't worry too much."(p. 13)) と励まし，料理人のアンプルは親しみを込めて「聞いたところではあなたは賢い女性だそうですね。それに，ボークスは魔法を使うことが出来るかも知れませんが，それほど賢くはないのです」("From what I've been told, you're a clever girl, and as for old Boax, he may be able to do magic, but he's not really all that bright, if you know what I mean."(pp. 18-19)) と語る。このように，女性の視点を通してアリーテの賢さが語られる時，男性によって忌み嫌われた彼女の賢さは否定するべきものから肯定するべきものへと変化し，価値の転換が起こる。女性の価値観が物語に導入され，女性同士の交流や連帯が描き出されるにつれて，アリーテの賢さは否定的なニュアンスを払拭され，優れた特質として認められるばかりか，彼女にとって騎士の鎧甲や剣にもまさる武器となる。彼女が三度にわたって，どんな勇敢な騎士も果たせなかった命懸けの難しい仕事を成し遂げた時，知識と行動力を伴った彼女の賢さは賞賛すべきものとなる。この時点で，女の賢さは悪にも等しいという言説は陰を潜め，女性の賢さは女性にとって決して邪魔なものではなく，自分らしく生きるために必要なものであることが示されるのである。

新しいロールモデルとしてのアリーテに込められた意図は，結婚の呪縛からの女性の解放と言い換えることも出来る。作者は，結婚自体を頭から否定しているのではなく，おとぎ話の女主人公によって発せられる，女性にとって結婚のみが人生の目的であり，幸せになる唯一の方法であるという言説，および，男性との結婚によってこそ現在の耐え難い状

況から抜け出せるという，結婚に対する幻想やその根底にある男性依存の考え方に異議を唱えているのである。事実，おとぎ話においては，結婚は，素敵な王子の出現，きらびやかな雰囲気など，大変理想化されたイメージで描かれるが，*The Clever Princess* においては，結婚は全く美化されていない。アリーテの結婚を望むのは父王とボークスという男性の側であり，父は宝物欲しさに，ボークスはアリーテの命欲しさに結婚を迫るのであり，ここで提示される結婚は，女性の意志を無視して男性の自己中心的な欲望のために行われる，父権的な社会の強制の結果としての結婚でしかない。

作者は，アリーテに「結婚したくありません」（"I don't think I want to get married." (p. 9)）と表明させることによって，彼女がおとぎ話的な結婚をすること，すなわち，男性に「選ばれる」ことを目的としていないことを示している。つまり，アリーテはシンデレラや白雪姫とは異なり，結婚ではなく自分の意志のままに自分らしく生きることを選択する女性として提示されるのである。また，アリーテは，結婚を人生最大の目的および幸せになる唯一の手段とは考えていないため，自分の特質である賢さを隠したり，自分の意見を押し殺したりして，男性の望む「理想の」女性像を演じる必要がない。このように，作者は，自分の人生を男性に委ねるのではなく自らの力で道を切り開くアリーテの存在を通して，おとぎ話では男性の側に握られている女主人公の結婚や人生を彼女自身の手に取り戻させ，シンデレラや白雪姫とは全く異なる生き方のロールモデルを提示しているのである。

5．家父長制と女性の連帯

新しいロールモデルとしてのアリーテは，賢いことをはじめとして多くの点でおとぎ話の女主人公のステレオタイプとは異なるが，彼女と父親の関係にも注目すべきものがある。父である王はアリーテの意志を無視して彼女を結婚させようとするが，この時に言及される，父親が娘の結婚を望めば，娘は父に従わなければならない（"if your father wants you to marry, you must obey him."(p. 13)）という法律はこの国の家父長的な体制を端的に物語っている。また，王女は結婚しなくてはならないという父王の考えにも反映されているように，家父長的な社会においては，結婚は父親の血統を守るために必要なものであり，結婚して子供をもうけることこそが女性の存在意義であるという考えすら成り立ちうる。このように考えれば，アリーテが父の命じる結婚を拒むのは，家父長的な社会に対する抵抗であるとも言えるのである。

また，ボークスが死んで自由の身になったアリーテは，その国の女王に推されることになるのだが，ハッピーエンドの結末にいたって，宝石と引き替えに自分をボークスに売り渡した父親を決して許さない気持ちが語られる。("She could not ever forgive him for selling her to Boax for a casket of jewels."(p. 55)) このことは，二つの点で注目に値する。第一には，アリーテが父を許さない態度は，シェークスピアの『リア王』(*King Lear*) において父親に極めて不当な扱いを受けたコーデリア（Cordelia）が，嘆き悲しむことはあっても少しも父を恨まず，後に失脚した父を当然のように愛を持って助けるのとは対照的である。この例を引くまでもなく，自己犠牲と無私の献身は，おとぎ話に限らず，これまでの多くの文学作品において，女性の特性や美徳として繰り返し登場してきた。ここで

も，作者は男性の不当な扱いにも母のような愛を持って許し続ける女性という，男性に都合の良いステレオタイプを打ち破ろうとしているようである。第二に，アリーテの父は家父長制の象徴であり，彼女の人格を無視する父親との断絶は，女性が自分らしく生きることを拒む男性中心の家父長制への決別の表明であるとも考えられよう。

男性優先的な家父長制の社会においては，システム防衛上，女性を悪として非難することが行われるが，おとぎ話においても，女主人公を苦しめる魔女的な女性の存在を利用して，女性に対する非難が行われる。男性は往々にして女性を善と悪，聖と俗などの二項対立の両極に分類したがる傾向があるが，同様に，家父長制の社会の因習を色濃く反映しているおとぎ話は，主人公を聖女として理想化しながらも，別の女性に徹底した悪を担わせて女主人公をいじめさせることにより，女性同士は嫉妬などから敵対するものであり決して互いに連帯する可能性はないというような，女性の社会性を否定する固定観念を発信している。*The Clever Princess* はこの偏見に満ちた固定観念にも挑戦している。アリーテにとって，女性は敵ではなく味方である。アリーテは魔法使いのおばあさんやアンプルらと女性同士の連帯を深め，彼女たちの支援を得る。この女性の連帯は，男性が悪役として女主人公を窮地に追いやること，男性の側が仲間割れをすること，アリーテを助けたり，彼女に好意的な態度を示す男性が一人も登場しないことなどによって，より一層強調される。

また，家父長制の社会を象徴する父王の城では，女性であるアリーテはいわゆる他者であり，彼女の生き方は男性によって支配されており，自分の意のままに生きることが出来ない。しかしながら，ボークスの城の場面においては，アンプルとの関係の他に，彼女の姪をはじめとする女性たちとの交流などの女性同士の親密な連帯が詳しく描かれるため，もはや，他者であるのは女性であるアリーテではなく，男性であるボークスの方であるかのような印象を受ける。さらに，アリーテが男性に嫌われる賢さで難題を解決し，ボークスと召使いが死んだ後では，この城の場面には，もはや男性も男性中心の価値観も存在しなくなる。城に残っているのはアリーテとアンプルと彼女が呼び寄せた魔法使いの老婦人という女性ばかりであり，アリーテが国の女王となることで，家父長制の影は完全に払拭される。

6．「フェミニズム童話」の可能性と問題点

The Clever Princess は，固定的なジェンダー認識を持つ古来からのおとぎ話に対してのアンチテーゼであるが，ここに描かれているのは，女性が男性と入れ替わるような単なるジェンダーの逆転ではない。確かに，おとぎ話において一般に男性のものであるとされている知性や勇気を男性の登場人物にではなく女性であるアリーテに与えたり，普通は男性に課せられる試練の旅を彼女にさせたり，女性が怖がると思われているネズミや蛇をアリーテにではなく男性のボークスに怖がらせたり，など，男女の固定的な性役割を逆転させている部分は数多くある。しかしながら，アリーテは，いかなる勇敢な騎士にも不可能であった三つの難題を克服する時でさえも，女性性を保ったままである。例えば，彼女は地下牢で積極的に自分の置かれた環境を良いものに変えようとするが，その時彼女がするのは，伝統的に女性が得意とするとされる縫い物などである。また，三回の冒険の場でも，彼女は男性の象徴である騎士と絶えず比較され，自然や動物に対する女性らしい柔らかで

優しい態度が強調される。そして，そのような，男性とは違った方法が男性には出来なかった難題の解決を可能にする。これは，『ベニスの商人』（*The Merchant of Venice*）のポーシャ（Portia）が難問を解決するために男装し男性の振りをすることによって，男性並の，いや，男性以上の活躍をするのとは大いに異なっている。すなわち，ポーシャが男装することで一種名誉男性化し，「男性のように優れた女性」として存在することで男性中心の価値観の補強につながっているのとは対照的に，アリーテの場合は，彼女が女性であるということが，活躍や冒険の場でも強く意識されるようになっている。つまり，アリーテにおいては，おとぎ話の女性のステレオタイプは否定されており，従来男性に帰されている特質も備えてはいるものの，女性の良い特質とされている点はそのまま保持されているのであり，アリーテは男性化した女性としてではなく，常に女性として存在するのである。

しかしながら，女性の登場人物が全員善人であることや，悪をはじめとする，知性の欠如，臆病，強欲などの多くの好ましくない要素がすべて男性の登場人物に集約されている点，最後には物語から男性を抹殺し，女性の連帯を強調し，みんなが幸せに暮らせる法律をもつ女性によるユートピアを提示するところは，見方によっては，男性を閉め出し，女性の価値観のみを良しとするような女性同士の閉じた関係の提示に終わってしまい，女性原理の男性原理に対する優越を主張するという，ちょうど男性主導の社会がこれまで行ってきたことの裏返しをするに過ぎなくなってしまう恐れもある。とは言え，おとぎ話が男性の価値観に基づいてステレオタイプ的ジェンダー観を何世代にも渡って再生産し続けていることを考えると，この極端とも言える女性中心の考え方は，真に男女が認め合い協調出来る社会を目指すための過渡的な段階においては，その存在価値は大きいと言えるであろう。

註

1. Diana Coles, *The Clever Princess* (Sheba Feminist Publishers, 1983). ロンドンにあった Sheba Feminist Publishers は現在すでに解散しており，原典を入手することは極めて困難であるため，小論においては日本で出版された英語版のテキストを使用する。*The Clever Princess* (Gakuyo Shobo, 1990).
2. 横浜女性フォーラム，「『アリーテ姫の冒険』あとがき」，グループ　ウィメンズ・プレイス（訳）『アリーテ姫の冒険』（学陽書房，1989）．なお，『アリーテ姫の冒険』は，日本の公立図書館においては，女性問題や女性学関係の本としてではなく，「子供の本」として分類されていることが多い。また，『アリーテ姫の冒険』は *The Clever Princess* を忠実に訳出したものではなく，ある程度の削除や変更を含んでいる。
3. Karen Newman, "Renaissance Family Politics and Shakespeare's *The Taming of the Shrew*," *English Literary Renaissance*, 16 (1986), 99.
4. おとぎ話の中に限らず，女性の賢さは，現代のアメリカの教育現場においてすら，あまり歓迎されていない。Myra and David Sadker, *Failing at Fairness: How Our Schools Cheat Girls* (Simon & Schuster, 1994) 参照。

参考文献

Diana Coles. *The Clever Princess*. London: Sheba Feminist Publishers, 1983.

————. *The Clever Princess*. Tokyo: Gakuyo Shobo, 1990.

————.『アリーテ姫の冒険』. グループ　ウィメンズ・プレイス訳. 東京：学陽書房, 1989.

Newman, Karen. "Renaissance Family Politics and *The Taming of the Shrew*." *English Literary Renaissance* 16 (1986).

Sadker, Myra and David. *Failing at Fairness: How Our Schools Cheat Girls*. New York: Simon & Schuster, 1994.

池上俊一.『聖女と魔女——ヨーロッパ中・近世の女たち』. 東京：講談社現代新書, 1992.

グループ　ウィメンズ・プレイス, 横浜女性フォーラム.「『アリーテ姫の冒険』あとがき」『アリーテ姫の冒険』東京：学陽書房, 1989.

徳見道夫.『シェイクスピアのロマンス劇——家父長制のドラマトゥルギー』東京：鶴見書店, 1994.

Gender in Fairy Tales and *The Clever Princess*

Hideko Taniguchi

Diana Coles's *The Clever Princess* is a feminist fantasy which sheds light on the stereotyped gender roles found in almost all fairy tales. The most important object of the story is to create a new type of heroine completely different from the traditional kind who, like Cinderella and Snow White, merely waits for a man/prince to help them escape from the circumstance they are in. In this paper I discuss gender in old fairy tales, comparing them with *The Clever Princess*, and clarify how the feminist story criticizes the stereotype of the heroine and creates a new role model. I also discuss its raison d'être and problems in addition.